

生徒会長 北千住 姫凛の悪夢

小説 神楽陽子

挿絵 アライノブ

立ち読み版



第一話 学園のコスプレ会長様

第二話 復讐の傷痕

第三話 男子寮のケツオナホール

第四話 狂淫の社交界

エピローグ 終わらない悪夢

006

049

111

183

253

登場人物紹介

Characters



きたせんじゅ きりん
北千住姫凛

北千住学園の理事長の娘で生徒会長も務める、超・目立ちたがり屋。幼少期は引っ込み思案な性格だったが、レオタードを身に纏って他人に“見られる”ことで自信を取り戻した。ファザコンの気が強く、学園の男子には興味がない。



うしくぼしの
牛久保志乃

姫凛の親友。テンションが高く、面白そうなことには何でも飛びつく。新聞部と兼部しつつも、生徒会の書記を務める。オタクが嫌い。

しらかわりま
白川莉磨

姫凛の世話を担当する、やや引っ込み思案な性格のメイド。感情を表に出すことが苦手。何をするにしても要領が悪く、姫凛を悩ませている。



さわたりきょうすけ
沢渡京介

女子からの人気が高いイケメン。志乃と交際中で、彼女の自慢の恋人。

たぶち
田淵

漫画同好会に所属する、ニキビデブで不潔な“キモオタ”。女子の評判は最悪。

うえむら
上村

北千住学園の体育教師。男子の授業を担当している。ややロリコンの気がある。

「志乃！ 正氣に戻って！」

ただひとり姫凜が怒りの矛先を向けられないのは、親友の志乃だけ。

しかし彼女は、いつもの冗談めいた薄情さではなく、血の通っていない冷酷さを笑みにして、舞台から去っていった。

「あとは何でも好きにすれば？ あたしは京介連れてこないと」

「牛久保ってほんと、やることエグいよねー。そこがいいんだけどさ」

裏新聞部の女子も志乃と一緒に、姫凜から遠ざかっていく。

ステージに残されたのは、生徒会長の北千住姫凜と、漫画同好会のメンバーである。

「ぐふっ！ 今日から会長は僕らの嫁www」

「コスプレ衣装も用意しないとな。魔法少女とか」

外見で人を差別してはいけない、と頭でわかっている、生理的な嫌悪感というものがある。同好会の面々は、不衛生なニキビで顔が黒ずんでおり、しかも手慰みに鼻をほじる者や、爪を噛む者までいた。

制服もくたびれており、身だしなみへの意識は少しも見られない。

おまけに体型はでっぷりと肥えているか、貧相に痩せ細っているかのどちらかだ。

「あ、あなたたち……わたくしをどうする気なの。事と次第によっては、全員、ただでは済まさないわよ」

不安はあっても臆病ではいられない。レオタードのおかげで気持ちも引き締まっている。姫凧は、気丈に言い放った。

もつとも肥えている部長の田淵が、ライトの逆光で眼鏡をぎらつかせる。

「反抗的な奴隷だなあ。ぐふ、そのほうが面白いんだけどさ」

ほかの薄汚い笑みもレオタード美女の前にまわり込んでくる。彼らの下品な目は、姫凧の豊満な肉体を品定めするようにしげしげと眺めていた。

膝立ちであつても生徒会長の背筋は綺麗に伸びており、セパレートタイプのレオタードからは、ボディラインが挑発的に食み出している。しかもレオタードのナイロン生地は極薄であり、その淡いピンク色は、色白の肌がやや透けた結果でもある。

(……遠慮もせずにジロジロと)

視線を察知した姫凧が身を振ると、モーブのストレートヘアが肩の前にも流れた。シルクのような質感は、日頃の手入れの賜物だ。

たわわな乳果のために、着ているというより「胸に被せた」ようなセーラー服は、学園指定のスカーフを丁寧に結んである。

左の半袖には、袖口に生徒会長の腕章をつけており、規格外の巨乳とともに抜群の存在感を放っていた。

セーラー服が左右に開く構造は、豊かな胸を押しさえすぎないためでもある。柔らかさと

重たさを独特の弾力とする乳玉は、大きいばかりでなく房の形もよく、華奢な身体つきに大胆なアクセントを加えてもいた。胸のサイズは九十二センチ。

「間近で見るとムチムチだあ〜」

オタクの無遠慮な視線が、姫凧の腰からお尻のラインを舐め降ろす。

「く……誰がそんなふうに、見ていいと……!!」

不埒なものを感じ、姫凧は「変身中、初めて」話し相手から顔を背けた。いつもなら「見られる」ことで自信がつくのに、今はそれが恥ずかしい。

節操を知らない男子の性的興奮が、気持ち悪いくらいに伝わってくるのだ。

（こんな目で見られるために着てるわけじゃないのに、こいつら）

しかもレオタードのハイレグカットは際どく切れ込んでおり、男どもの視線を集中的に誘ってしまう。肉付きのよい太腿はむっちりと露出しており、布地の面積が足りていないクロッチと相まって、姫凧の肉体は扇情的な挑発を装っていた。

膝立ちでやや前のめりになるポーズだと、胸やお尻の曲線がアピールされる。

「はやく解きなさい！ わたくしは志乃を追いかけたいの」

それでも恥ずかしくなってしまう。視線慣れしているはずの身体を、意識的に力ませて、反抗を強める。

肉体のエロティシズムに満ちた生徒会長の姿を前に、オタクたちは下品な種類の興奮を

隠そうとしなかった。田淵がにやついて、爪の伸びた親指を噛む。

「知ってるウ？ 会長、月曜の朝礼のあとって、男子便所はすごく混むんだ」

「は？ ……どういう意味？」

問いかげの意味がわからず、レオタード美女は首を傾げた。

「会長のこの格好にガマンできなくなつて、みんな、オナニーしに行くんだよオ。僕らはいつも、ハア、部室でオナつてるんだけどね」

「な……っ！」

下劣な対象にされていることを聞かされ、頭に血が昇つてしまう。

男性が具体的にどうオナニーをするかまでは知らない。それでも「男性器から液を出す」ことからして、汚らしい行為であることは想像に容易かった。

「そ、そんなのはあなたたちだけでしょう？ 北千住学園の男子は、紳士が基本よ！」

「フヒヒ！ だんだん本性出てきたね、会長オ。僕たちオタクが嫌いなんだろ？」

凛々しく眉を引き締める生徒会長の整った美貌に、ニキビデブの顔が近づく。唾液臭のきつい口臭を吐きかけられて、くさい。

「生徒会はいつも僕たち漫画同好会に冷たいじゃないか。前の部室は取り上げる、部費は出さない、僕らだけトイレ掃除……似たようなことやつてる文芸部のほうは、部費で同人誌も出してるのにさ」

「違うわ、それはわたくしじゃなくって、志乃が——」

反論しそうになったところで、はつとして姫凧は口を噤む。

漫画同好会を冷遇していたのは、志乃である。しかし、あれもこれも志乃のせいにするば、この連中に志乃が狙われてしまう可能性がある。

「ん？ 牛久保さんがどうしたって？ ……そういや、牛久保さんみたいなロリ体型もいいよなア。ちゃんと生えてるかどーか、みんなで確認とか、フヒヒ！」

「ふざけないで！」

友達を馬鹿にされて、生徒会長は激昂した。両手で拘束具を引っ張りつつ、田淵に反抗の言葉を投げまくる。

「そうよ、わたくしはあなたたちが大嫌いだわ！」

志乃がよく口にする蔑称「キモオタ」の意味が、少しわかった気がする。女性なら誰であれ、漫画同好会を軽蔑して当然だった。

「文芸部は何ヶ月も学園に遅くまで残って、やつと作品を仕上げたの。ほかの生徒から『読みたい』という要望も多かったから、部費も多めに出したわ。だけど、あなたたち漫画同好会には相応の努力と、みんなからの応援があるの？」

最初の一言が出てくると、考えるまでもなく次の台詞もすらすら飛び出して来る。手足を封じられていようとも、北千住姫凧の会長節は健在だ。

「部室にこもってアニメを見ているだけの同好会に、部費が出るわけないでしょう！」

「こ、ここ……このオ！ さっきから好き勝手言いやがって！」

罵倒が効いたらしい。ニキビデブの田淵が顔を赤くして、わなわなと震える。

「奴隷の立場ってのを教えてやる！」

田淵の平手打ちがバシンと姫凜の頬に入った。けれども痛みはない。

むしろ完全勝利で気分がいい。

「言い返せないの？ その程度の部活動、だったのね」

彼は正當に反論できず、負け惜しみとして単純な暴力に訴えたのだ。ほかの部員も悔しそうに苛立っている。

「部長、もう始めちゃおうぜ。部室とか部費の話はあとでいいだろ」

「そ、そうだな。僕ら漫画同好会の力を思い知らせてやる」

そして、田淵を中心に姫凜の周囲に集まってくる。

彼らを言い負かすことはできても、姫凜の身体は本能的な危機を感じていた。

（こいつら、まさか……わたくしを）

暴行するつもり、なのだろう。そのような外道の所業は、機会があってもできないように思うのだが、彼らのような底辺の男性は違うらしい。

（はやく脱出して、志乃を追わないと。幕の向こうにも大勢いるはずだし）

状況整理で頭をフル回転させ、打開策を探す。

ところが、思考の最中にぞわつと怖気が走った。

「あつ？ ど……どこを触って！」

「俺、フライングー！ これがオニヤノコか、スベスベだな」

背後から部員のひとりが襲いかかってくるまで、レオタードのラインに手を這わせたのだ。腰の括れをなぞり、へそまわりの露出を撫でまわす。

薄生地を捲られそうになり、姫凛はつい動揺してしまった。

「わたくしに触らないで頂戴！ さ……触るなって、言ってるでしょ！」

方が一にもレオタードを脱がされたら、強い自分を保っていられなくなる。普段から豊かなプロポーションを「見られる」ことで、自信を高めているのだから。

しかし下衆は、姫凛の抵抗を意に介さない。

「この感触やめらんねえ！ お前も触ってみろって」

「どれどれ？ うおっ、フトモモ、スツベスベ！」

それどころか人数は増えて、姫凛のあられもない太腿をさすった。

茹で卵みたいに艶のある、すべやかな柔肌を、汚い手が徘徊する。おぞましさに鳥肌が立つほど、肌は敏感になって手の動きをいちいち感覚してしまうのが、忌々しい。

「い……いつまで、くう、触って」

レオタードは汗で蒸れ始めて、押し揉まれるたびに縮まり、肉感的なプロポーションをいつそう締め付けた。

正面の田淵がリードを引っ張り、姫凜の顔を覗き込む。

「どう？ 会長、気持ちよくなってきた？」

「そんなわけ……ないじゃないのッ！」

快感などあるはずもなかった。それこそ、男たちの指のひとつひとつが何かの幼虫に思えて、気持ち悪い。

無防備なレオタードに真後ろからも視線を差し込まれているのがわかる。姫凜はロングヘアを背中側へと戻し、少しでも肌の露出を隠そうとした。

「隠すなよ、会長。これは俺らの正式な部活動なんだぜ？ じきに部費を山ほど出したくなるようにしてやるからさ」

しかし後ろの男子が、優美なストリートヘアをかきわけ、レオタードの背面を露わにしてしまう。レオタードはデザイン上、背中ががら空きで、隙だらけ。

形よく実ったお尻が、太腿の小さな動きにも連動し、薄生地を谷間に食い込ませる。無駄な脂肪の付き方はしておらず、レオタードの生地も丸く綺麗に張っていた。それでも汗が薄生地を吸い付かせて、お尻の谷間に衣擦れを感触させる。

「こんな部活、わたくしが認めるわけ……うっ？」

尻布の両脇から食み出す生の曲線にも手を這わされると、生理的な震えが生じ、背筋がくいつと伸び上がってしまう。その反動でセーラー服の膨らみも揺れ、短い裾から乳果実の形をちらつかせた。

際どい露出を魅力とした悩殺のスタイルに、オタクどもが生唾を呑む。

「生徒会長のおかげで僕らの股間は毎日が風紀違反だお。フヒヒw」
憧れのまなごしに慣れすぎた肉体に、男性の下卑た視線が絡みついてくる。

「ど、どこまでも下品なことを……」

言い返すつもりだったのに、姫凜は声を荒らげることができなかった。見られる自信と同等の、もしくはそれ以上の、見られる恥ずかしさが、胸の中に忍び込む。

次第に身体のラインが気になって、無意識に太腿をきつく閉じ合わせていた。そのせいでレオタードが余計に、お尻の谷間に食い込んでしまう。

その食い込みをなおしたくても、腕は拘束されていて使えない。もじもじと弱気に太腿を擦り合わせるだけ。

「じゃあメインディッシュは部長の僕が……おとおつ！ 柔らかいなあ！」

「きゃっ？ な……何するのよ、この変態！」

お尻にばかり気を取られて、対応できなかった。正面の田淵が意気揚々と、生徒会長の豊かな巨乳を押し搦んだのである。



歪んだ優越感に浸っているようだった。これまで田淵という男子生徒が、忌み嫌われていたことは、想像に難くない。

「こういうことをするから、はあ、嫌われるんでしょ……わからないの？」

「僕を蔑んだやつらに、僕の偉大な力つてやつを見せてやるのさ！」

すれ違う生徒たちに奇異の視線を向けられながらも、北千住姫凜は心の中で、この男を軽蔑した。人間として矮小で、腐りきっている。

(……最低だわ)

単純な憎しみとは異なる、人間性そのものへの嫌悪感だ。

しかし豊満な肉体は汗だくになって、発情期のおいを漂わせた。望んだものではないにせよ、猥褻の実感と、膣内に仕込まれたローターが、だんだん感度を高めてしまう。

レオタードが湿っているせいで、汗の粘り気もより強く感じられる。

「つくくは、い、いいい……これ抜きなさいよ、はやく！」

姫凜は肛門でステッキを振りかざし、何度も腰でびくんと跳ねた。息継ぎの回数が多くなり、灼けた吐息で咽が渇く。昨夜は雨水を飲んでいられたものの、今朝からまともに水分を摂取してもいない。

「なあ田淵い、姫凜たん、奴隷の立場がわかってないみたいだぜ。見てくれはイイ感じに仕上がってきてただけどなあ」

両隣の男子に放されても、廊下に両手をつくのが精一杯だ。みっともない四つん這いとなり、生徒たちに見下ろされる頭の低さで、犬がするみたいに涎を垂らす。

(オシリのだけでも、抜かないと……)

ステッキが傾くたびに驚いて、意識は穴にばかり集中した。尻頬を力ませる以外に方法がなく、歯軋りは十秒も続かない。

生徒たちが端に寄って空けた廊下を、犬の姫凜とキモオタの集団が独占する。

「生徒会長って、とんでもない変態だったんだな。見ろよ、あれ……ケツに挿さってんじゃないのか？」

「やだ、気持ち悪い……なんでこんなひとが生徒会長なの？」

ものの数分で人だかりとなる、アナル会長の散歩道。疑惑は蔑みにも変わり、学園から追いつてるような視線が、姫凜の変態行為を見送った。

(なんとかしないと、わたくし、この学園にいられなくなるのに！)

目の前が真っ暗になるような絶望感が、姫凜の前後左右を威圧する。これまでの楽しい学園生活を幻想か理想のように感じ、過酷な現実を思い知らされる。

しかし表情は真っ青になるどころか、ほの赤く上気していた。緩みがちな唇の上で舌をのたくらせ、唾液のぬめりを広げる。思いもしないような色っぽい声も出てしまう。

「っんあ？ はあ、聞いて頂戴、んむう、これには理由が、あつて」

周囲の皆に説明しようにも、悩ましい声色では説得力がない。

四つん這いの真下では巨乳がたゆんと揺れ、湿ったレオタードを伸び縮みさせた。女子でただひとりスカートを穿いていない下半身には、ブルマの薄生地が食い込む。

自慢のストリートヘアはばらけて、波打つことなく廊下に引きずられている。その一方でアナルステッキは高い位置で支えられ、綺麗な弧を描いた。

それでも弱気になつてなどいられない。

「フヒヒっ！ 姫凜たん、どうしたい？ 出しちゃつてもいいんだぞオ？」

「どこまでも、ふ、ふざけないで……田淵ッ！」

陵辱者のおどけた嘲笑に憤り、歯を食い縛つてでも仰向く。このまま一矢も報いることなく終わつて、たまるものか。

レオタード美女はむちむちの太腿を汗で照り返らせながら、火照つた肉体を運んだ。わずかに股を開いているのは、ステッキとローターで股関節が痺れるせいだ。

「んはあ、はあ……う、あはあ？」

女穴のほうで小さな漏出感が閃き、たつた今「濡れた」のがわかる。それに気を取られると、危うく肛門が緩みそうになる堂々巡り。

肉体とともにある多感な心は、屈辱と羞恥によつて荒らされた。

白昼堂々と猥褻を、させられているのに、周囲の生徒たちには、姫凜が自ら望んでして

いるように見えるのだろうか。女子があとずさり、腕章付きの牝犬を軽蔑する。

「もう行こ。今までこんな尊敬してたのがバカみたい」

同性の言葉だからこそ、プライドを打ちのめされた。キモオタと同類とみなされ、女性として以前に人間としても蔑まれる。

先ほど姫凜が田淵を「最低」と思ったように。

(どうしてこんなことに……)

それなのに、股底が潤っているのがわからない。ローターを仕込まれたとはいえ、濡れる生理現象が始まっており、熱い雫が太腿の内側を伝い落ちていく。

ブルマも股布だけ湿って、秘部を舐められるかのような感覚だ。

止まろうとすると、田淵に髪を引っ張られる。

「漫画同好会はヒキコモリの集団じゃないってとこを見せてやらないとねえ」

「いたい！ 放しなさいっ、はあ、あ、歩けばいいんでしょ？」

玩具のマジカルステッキを派手に光らせながら、グラウンドを横切ると、あらゆる部活が練習を中断した。

「おいお前ら、練習中に入って……げっ、なんだあれ!？」

生徒会長であるにもかかわらず、健全な部活動の邪魔をして。

同好会の連中に連れられていった先は、北千住学園の男子寮だった。その正面玄関で、

メンバーがカメラ機材を設置しなす。

「——あふっ!? く、くうう!」

不意打ちみたいにステッキを引っこ抜かれ、危うく肛門を開放してしまうところだった。ぎりぎり間に合った我慢の力がモノを押し留め、ブルマの生地も戻ってくる。

さらに部員たちは姫凜の身体を抱えあげ、あるものに放り込んだ。

「これが姫凜さんの犬小屋だぞ、せーの!」

「やっやめなさ、あひい!」

それは人が丸ごと入るサイズの、大きなポリバケツ。

(こ、今度は何をさせるつもりなの?)

バケツの側面には「男子便所」などと貼られており、嫌な予感しかしない。

悪趣味な田淵がにやつき、ごそごそとジツパーを降ろす。

「姫凜さんを男子寮の即席便所にするんだよオ。みんな、寮の中まで我慢できなかつたりするからねえ。フヒヒ」

「便所? どういう意味で……いやあああああ!」

その意味は聞くまでもなかった。ニキビデブが醜い包茎を取り出し、ポリバケツの中へと尿を垂らし始めたのである。

ジヨボジヨボジヨボジヨボ!

煮えた液体が姫凜のボディラインを流れ、腰の位置からブルマにも染み込んでいく。憎たらしい田淵のものだからなのか、異様に生臭い。

生理的な嫌悪感で全身の産毛が逆立つと、尿の流れを余計に感じてしまう。

「きつ、きたない、やめて！ ……うえつぶ、はあ、くさひ！」

汚いオシッコは姫凜の小顔にも狙って飛んだ。言葉通り「便所」にされて、身体中から異臭が漂ううえ、ポリバケツの底に溜まっている。

「おっと、便所は喋らないだろ〜」

のみならず、ある部員が一枚の布きれを猿ぐつわみたいにして、姫凜の口を縛ってしまふ。見覚えのあるそれは、姫凜がトイレ掃除で使った、レオタードのVの字だった。

便器などを磨いて汚れた薄生地を、嫌でも噛むはめに。

「ううぐう！ んぐいう！」

「人間様に便器語はわからないね、フヒヒ！」

それからほかの部員たちも次々と、ポリバケツの中に尿を流し込んでくる。

ジョロロロロ！ ジョロロジョロジョロジョロジョロ！

「んんううぐつ！ んいいいいいい！」

男子便所の姫凜は、猿ぐつわのせいで叫ぶこともできず、体温以上のシャワーを浴びせられた。噓せるような悪臭が鼻の奥から涙腺を刺激し、涙ぐむ。

涙など見せたくないの、反射的にぼろぼろと。

(こんな真似をされるなんて……！)

その涙が自分でも惨めつたらしくて、悔しい。

オタクどもはせせら笑い、姫凧の泣き顔をねめつけた。

「さすがの姫凧さんも泣いちゃったなあ」

視聴覚室の時と同じように、姫凧の目の高さにノートパソコンを置かれる。

この状況も配信されており、リアルタイムの書き込みは殺到状態だ。

『ちょw何このエロ便器www 勃起して小便どころじゃねえよ』

『くさすぎて逆に性欲も消沈するわw と言いつつ俺はオナってるんだが』

ポリバケツに放り込まれ、小便をかけられた一部始終が、すでにインターネットに流出しているのである。閲覧者数は百を超えていた。

間違いない彼らは姫凧の、表情や拳動のすべてを凝視している。

「ううぐっ！ らめ、やめあはい！」

『泣いてんだか小便流れてんだかわかんねえな』

表情は別のカメラでズームにされ、鼻をすすする小さな動きまで、鮮明だ。

「とりあえず一時間くらい便器体験してみようか。そのあとで続きしようねえ」

田淵たち漫画同好会は、姫凧を置き去りにして去ってしまう。ポリバケツは狭いうえに

深く、自力で抜け出すのは難しい。

「んんんん……んうぐ、うあ、ああ……」

しばらくもがいていた姫凜ではあったが、肉体的にも精神的にも、疲労はピークに達していた。大声を張り上げてばかりいたせいもあって、咽はからからだ。

悪臭の中もお腹がぐううと鳴る。

(だめ……出られないし、お腹空いて、もう力が)

そんな状態で湿った薄生地を噛んでいると、口が勝手に、すする動きを始めた。頭ではおかしい、異常だとわかっているけど、咽の渴きには抗えない。

くちやつ、くちやつ！ くちやつ！

悔し涙もろともレオタードの生地を噛み鳴らす。

舌に染みてくるのは、腐ったような味だった。便器を磨く雑巾にしたのだから、これが尿の味なのだろう。そのわずかな小便で咽を潤すしかなくて、歯がゆい。

「んおおぐ、よぐも、えあ……わはくひに、んえ、ろんなおと」

生臭く、頻繁にえずく。

『こいつパンツかじってるな。アタマどうにか——』

パソコンの書き込みをそれ以上見るのが怖い。

「生徒会長！ いいですか？」

そこへ漫画同好会とは別の男子グループがやってきた。野球部の面々だ。

「ふおっぐ、おねあい、ひは、これはずふいてちよおだい」

やつと助けてもらえろと思ひ、安堵する。

ところが野球部員たちは、ポリバケツの前でジッパーを開き、膨らみつつあるペニスを取り出す。姫凜はぎくりと瞳を強張らせ、彼らの歪な笑みを、恐怖とともに見上げた。

「へっへっへ、これがオタク部の言つた便所つてやつか。じゃあ早速」

肉茎が尿をしぶかせ、姫凜の呼吸を妨げる。

ジョロロロロロロロ!

「ひあつく!! ううお、えおおおおおお!!」

咽の裏返るような声が食道を引つ張りあげ、吐き気を催す。生温かい液体は姫凜の肉体を幾筋にも伝い落ち、ポリバケツの底に溜まつていった。

噎せ返る便器臭をおわせる生徒会長に目掛けて、また別の放物線が飛んでくる。息を

継ぐ暇もなく小便まみれに。

「おー? 野球部、独り占めすんなよな。みんなの便所だろ」

「わかつてるつて。見ろよ、北千住会長のこのカッコ!」

男子どもはあとからあとから増えた。野球部の次はサッカー部、ラグビー部など、体育会系の男子生徒が、寮の正門前に群がってくる。



男子便所

「こすつちやいや！ ひええあつくる、きへるの、つだめ、えはれええ！」

「随分と気持ちよさそうじゃねえか、ハア！ す、すげえ締め付け！」

弾むお尻に追いつがって、男子がペースを跳ね上げる。ブルマを掴むことで密着し、姫凛の狭苦しいアナルに繰り返し拡張感を送り込む。

「ひはうっあ！ オシリっ、めくれへる！ んああ、ひはあん！」

粘膜は裏返って飛び出しそうになっていた。抜き挿しの最中も、数え切れない手に太腿やお尻を触られ、汁みどろの生乳を揉みしだかれる。

乳頭をぎゅっと抓られるのが、少し痛い。

そのために注意が散漫したところへ、肛門快美が強い痺れを引き起こす。

「オシリのっはやく！ はやく抜いて、んひはあ！ はっはやく！」

尻穴生徒会長はアナルセックスでみつともなく悦がり、涎を垂らした。斜め上へと伸ばした左脚が引き攣り、爪先でくいつともがく。

ブルマ女子の悩ましい悶え姿を、男子どもがにやにやと取り囲んだ。

「くっそ、俺は六番目かよ。ハア、はやくやりてえ！」

「俺はパイズリにすっかなー。エロいカラダしやがって」

これまでは自慢だった豊満な肉体が恥ずかしい。彼らの脂ぎった視線が、嫌というほどまとわりついて、姫凛の一挙手一投足を観察するのである。

学園指定のブルマも隙だらけ。手がいくつも入り込んで、汗だくの柔肌を押し揉む。「ひあつふ、もお、もうさわらないでっ、あん！ あっ、あはあんああ！」

拒絶にならない春声を張り上げ、姫凛は誘うように悶えるばかり。

アナルが淫らな包容力を発揮し、肉棒を包み込んだ。

びゆるびゆる！ びゅびゅっ、びゅくびゅく！

さつきと同じ、漏らしたような感覚が直腸を逆流してくる。精液の嫌悪感ほとんど機能せず、生徒会長は感嘆めいた息を長く吐いて、粘膜に子種が染み渡るのを感じた。

「ただはれて、えひあ、らはれへう……！」

中に出された、という自覚が猥褻感を高め、ぞくぞくする。焦点のずれた瞳をうつつりと細くして、動物性の涎を滴らせる。

青臭さで呼吸器官も犯され、惨めな鼻水が止まらない。

(オシリで……わたくし、また、出されて……?)

何がどう悔しいのか、苦しいのか、ますますわからなくなってきた。肛門で閃く快感を無自覚に堪能し、紺色のブルマを熱く濡らす。

二本目が抜け、続けざまに三本目が入ろうとした時だった。

「おい！ お前ら、何をやってるんだ？」

ジャージ姿の男性教師がやってきて、陵辱の輪に割り込んでくる。男子寮で宿直も担当

している、体育教師の上村だ。

これで助かった、などと安心することはもうなかった。

「ただの抜き挿しで喜んでいるようじゃあ、ガキだぞ？ どれどれ、先生が手本を見せてやろうじゃないか」

男子生徒と同じく下卑た笑みを浮かべ、姫凜のプロポーションを舐めまわす。数十本の暴力ペニスが一本増えただけのこと。

「元AV男優のテクニクつてのを見せてやろう。北千住にも、先週の礼にな！」

「ぎやははは！ さすが先生、尊敬します！」

教師まで一緒になり、肛門陵辱がエスカレートする。

つい先週までの北千住姫凜は二度と取り戻せないのだと、痛感した。

（わたくしは……べ、べんじよ……？）

皆の憧れだった気高くて美しい生徒会長が、公衆便所そのものだ。便器の自覚が大きく、臆病な尻穴は自力で拡がろうとする。

男子生徒たちが上村の指示に従い、姫凜の身体を担ぎ上げた。

「ああふ？ こ、こんどはなにを、つはあ、ううく！」

喋るだけでも体力を消耗するほどに疲れ果て、抗うことができない。

上村がジャージをずり降ろして、体毛だらけの下半身を晒した。ほかの男子よりも鋭く

反りあがったペニスが、ブルマ女子の後ろをつけ狙う。

「いいか、アナルはこの角度だ！ ッハア！」

水平に近い入射角であり、上村の胴が姫凜の背中と接触した。

ぐぶぐぶぐぶっ！ ぐぼぐぼ！

すると肛門が異音を鳴らし、極太を丸ごと呑み込んだのである。

「いいついでないで！ もおらめ、ひろっ、ひろがつれ、んは、もどんなひ！」

ブルマを引っ掴まれては逃げられない。上村の勃起は間違いなく尾てい骨まで届いており、深さが段違いだ。

卑猥な拡張感、肛門から背中へと伸びていた。サオを食い締める出入り口がひりつき、黄濁を滲ませる。中に出された精液もローションとなつているのかもしれない。

さらに上村が姫凜を、横向きにひっくり返す。

「よく拡がるケツ穴だ、いいぞ、北千住！ 先生と今度AV撮るか！」

「あああふ？ ねじれへるっ、オシリの中、っあん、ねじれへ！」

側位となったブルマ女子を、複数の男子が抱えなおす。

AVならずで撮影されていた。この状況もインターネットで配信されているのだ。男子のひとりがノートパソコンを持って、姫凜に書き込みを見せびらかす。

『リアル便女キター！ 何人目でイクかの巻w』

『オフ会してくれよ。入学説明会のサーブスでまわすとか』

男という男の生き物すべてが、北千住姫凜を性欲のはけ口としか見ていなかった。

ネット配信されているにもかかわらず、教師の上村が乱暴なピストンを繰り出し、姫凜のアナルを穿り返す。

ぐぼっぐぼ！　ぐぼぐぼぐぼ！

精液ローションの効果もあつて、ぬるぬるとスライドする。

「北千住ッ、感じているか？　ハア、これが本物のアナルセックスだぞ！」

「あへえああああ？　ひへっえ、んぷあつ！　はっ、はげしいッ！」

今まで体験したストロークはどれも直線的だった。ところが上村のペニスは、左右への捻りも織り交ぜ、姫凜の排泄器官を攪拌するのである。ピストンを折り返すのも速い。

「やめてくらはい、せつ、せんせえ！　うひあい、えあつお！」

直腸だけでなく、頭の中もぐちゃぐちゃにかき混ぜられるみたいで、意識が飛びそうになる。そのたび、強い快感で現実へと引き戻されてしまう。

熟れた肉体は生乳を弾ませ、腰もいやらしくくねった。ひっきりなしに牝痺れを体内へと送り込まれ、全身の神経が過敏になる。触られるだけでもぞくつとする。

「こんな、ふかすぎれっ、んうんぢゅうッ!!」

喘ぐ唇に新しい一本を捻り込まれた。太すぎる口枷のせいで人間の言語もままならず、

便器語でもがくだけ。

「んもごおおッ、おぶ！ んはあれ、お、おひりに、おええぐ！」

生乳を見せつけるように捲れたセーラー服へと、唇の両端から涎の糸を垂らす。湿った薄生地に指を通す両手にも、熱硬い肉茎を握らされた。男根との接触そのものに興奮してしまつて、無自覚にテコキに励む。

「チンポくさくなつてきたなあ、会長！ 気分はどうだ？」

犯されていない牝穴でも、ローターの振動があり、肉体の快感は増える一方だ。これで感じなかつたら女ではない、とさえ思えてくる。

（おかさされてるのに、か、かんじて……）

もつとも気持ちいいのはアナルだった。上村のピストンは刺激に絶妙な緩急があり、拒絶しきれない快楽を、姫凜の尻穴に強制する。

ぐぶぐぼっ！ ぐぼ！ ぐぼっぐぼっぐぼっ！

大きなモノをひり出したり、引つ込めたりするような快感が連鎖した。

「はれしくつんぢゅ！ ぷあっ、しちややあ、ん、んひうむ！」

最大まで溜まつた便を一気にひり出すような快感が、とめどない。排泄の穴だからこそ太いほど心地よく、外れかかったらバキュームが急ぐ。

むっちりとした太腿には上村の涎が垂れ、男子の手も這いまわつた。

「いつもこんな格好で、ハア、ハア！ 先生に犯されなくても思ってたのか！ 教育的指導だぞ、こいつは！」

「んぐうおおおっ？ おあむ、っんぐ！ ひええれう、おえ、んぢゆう！」

眼前にも剛直が突っ込んできて、姫凜の緩んだ唇を抉る。

穴と唇で男性の乱暴を受け止めつつ、それでも姫凜は、握ったサオを優しくマッサージしていた。彼らの、射精への意欲が伝わってきて、じきに出そうなのがわかる。根元からのうち、カウパーをびゅつと噴く。

握った二本も亀頭を真つ赤に充血させ、蜜を生んだ。

「わはくしっ、んぐむ、れ、べんきなんかじゃ……」

嫌がるふりに徹していないと、牡のにおいと、穴の快楽に溺れてしまいそうだ。絶頂を拒むブレーキはすでにへし折れ、汗みずくの肉体が、悦んで乳肉を揺らしまくる。

ちゅばつぐちゃ！ ぬちゅぐちゃちゃつ、ぐぶつぐぼつぐぼ！

最低限の拒絶はできても、コスプレを乱されたせいで、抵抗が形にならない。抵抗の意志さえ自分で疑わしく、頭の中で、結合音ばかり大きくなる。

「た、たしゆけて……パパあ！」

そんな弱音さえ無意識に漏らしていた。自分の無力さを認めてしまったために、もう気丈ではいられない。生徒会長のファザコン発言も男子たちに笑われる。

「このビデオ、パパに送ってやろうか？　ぎやははは！」

「やめて！　いまのはわたくし、えひああつ？　おおつ、オシリのなかれえ！」

上村のペニス毎回、結腸孔に命中した。

「そろそろだ！　先生もつと耐えられるつもりだったんだけどな、ハアツ、北千住のアナルには百点満点くれてやる！」

アナルの動きは収縮よりも拡張が多くなり、お尻の中が強烈に痺れつく。

「んあつあぐう、えむう！　つぶあ、き、きへるうううッ！」

頭の中から思考が吹き飛び、快楽の一角に染め上げられる。小便と精液でどろどろの生徒会長は、無自覚に腰でスケベに踊りつつ、目の前の肉棒を吸い上げた。

ぢゅばつぢゅぶぢゅば！　ぐぶぐぼつ、ぐぼぐぼぐぼつ！

視界の上半分には長睫毛がかかっており、焦点は外れつ放し。

「あへえう！　もおらめつえぐ、おはぢゅう！」

抜き挿しが病みつきになったかのような中毒症状が、しどけない笑みになる。涙の意味も悦びのものと解釈されそうだ。

ローターの入った秘裂が洪水を起こし、ブルマの股底を熱くする。

（わたくし……だめ、なのに……）

ここまで感度が高まって、どうして感じてはいけないのか、わからない。

「んぶぶつ、きはつ、き、きちやつへるう！ オシリきひやう……た、たしゆけへ！」

嫌がる理由を見失ったまま拒絶するものの、肉体はアナルの快楽に甘んじていた。側位のため、肉棒の捻りも効いて、粘膜を滅茶苦茶に穿られる。

拡がりつつ窄まる肛門が緊縮し、陵辱棒を苛烈に食い締めた。

びゆるびゆるびゆる！ びくびくびくつ、どびゆ！ どびゆどびゆどびゆ！

俄かに自分のものではない液が溢れ、結腸まで逆流する。

アナルの感じ方を知ってしまった姫凜はしゃくりあげ、眼前のペニスに舌を這わせながら、病的な痙攣に陥った。

「おっおおお、おひ、おひりきたつ、キタ——ッ！ きへるのつ、イクのがいつぱい、あへえあつ、きへつ、きてれえええええええ、えへえええええ……！」

ソプラノボイスでいななき、表情をうつとりと惚けさせる。人間の女性ではなくなった浅ましい顔つきで、瞳を淫猥な悦びで満たす。

ブルマの中でまたお漏らししてしまっているのは内緒だ。

チヨロチヨロチヨロ……！

潮噴きの代わりに小水を漏らして、エクスタシーの快美感に打ち震える。

陶然とする精液便所に目掛けて、四方八方から汚濁が飛びかかった。びゆるるるるる！ びゆるつ、びゆるびゆる！



ター！ 何人目でイカかの巻w
んよ。入学説明会のサービスで
www
www
www
エロイwww エロ女
すげーwww マル見え
この女見たことあるわwww
れマッwww

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

11年目も激しさそのまま、お楽しみもそのままで!

EDDREAMIMM

さらさら
おもしろ
かわいく
プリム
お楽しみ
お楽しみ

偶数月
17日発売

Vol.61
2011年12月

ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

大興奮! 魔法使いのHコミック!

魔法使いのHコミック!

特大の
魔法使い
Hisasi

奇数月
12日発売

コミックファンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

Prism
コミックプリズム

18歳以上
420円

あつあつボディ
いっぱい聞かせて!

2・6・10月
下旬発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス
Vol.1

自分勝せぬ
雷のライ
和馬村政
対魔が
フルブルギスの
目覚めと淫靡
美少女対心交
ハーレムキガ

奇数月
中旬発売

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

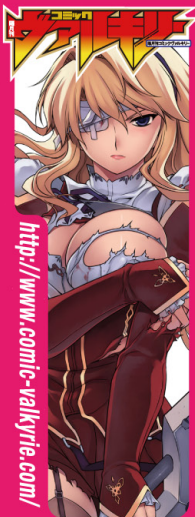
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!